doi:10.14951/JSNC.17.01.01

■ 理事長就任挨拶

# 心臓核医学会理事長就任にあたって

山科　章
東京医科大学　循環器内科

平成26年6月に石田良雄前理事長のあとを受け、心臓学医学会理事長を拝命しました。日本心臓核医学会は1998年に発足した比較的新しい学会ではありますが、循環器系の学会と核医学会を補完する重要な学会として位置づけられています。心臓核医学会の目的は、“心臓核医学に関する基礎および臨床研究の推進とその普及をはかり、それを通じてわが国の医療の発展に寄与すること、本会の活動を通じて心臓核医学が正しく普及し、活用されること”です。心臓核医学会の会員総数は567名と決して多くはありません。しかし、本学会は、これまで24回の学術集会を開催し、多くの学術的情報を発信し、この領域において確固たる地位を築いてきました。

私自身、本会の創立当時からメンバーとして参加しておりますが、この20年近くで循環器画像診断は大きく進歩し、心臓核医学を取り巻く環境が大きく変化していることを実感しています。冠動脈疾患を例にあげますと、その治療は患者の症状、内科的治療の状況、冠動脈の形態、虚血の有無ないしその範囲、で判断する時代になっています。診断法も患者のアウトカム改善につながるストラテジーが要求されています。虚血の評価という点でも心臓核医学は重要な立ち位置にあります。心臓核医学検査には短所もありますが、多くの長所があります。核医学のもつ機能情報を他のモダリティーと組み合わせることによって患者の利益につながる判断ができます。しかし、他のモダリティーは急速に進歩しており、心臓核医学も相応の進歩が必要です。

そういった状況を認識したうえで心臓核医学会がさらに発展するよう、努力したいと思います。学会のおもな事業は学術集会の開催、学会誌の発行、他学会との交流、教育啓発活動、ガイドライン作成やステートメントを含む心臓核医学に関する重要な情報の発信です。

学会として存続するには、新たなエビデンスの創出と重要な情報の継続的発信が必須です。そのためには、学術集会および学会誌の充実を任期中の最重要課題として取り組みたいと思います。特に学会誌の英文化は必須と考えます。一方で心臓核医学のよさが多くの循環器科医、特に若手の研修医に認識されていないように思います。学会HPによる各種の役立つ情報の提供、教育セミナーや他学会とのジョイントセミナー、地域別研修会の充実とその継続的な開催、さらには、循環器専門医や核医学専門医が単位取得のための研修や認定にもかかわっていくことが必要と考えています。中嶋憲一副理事長、吉永恵一郎編集委員長とタッグを組んで、わが国における心臓核医学のさらなる普及・発展に取り組んでゆきたいと思います。